

〔春の意匠—花やぐ季節の贈りもの—展によせて〕

桃花のイメージについて

桃は、梅や桜と同じくバラ目バラ科サクラ属の樹木で、花の咲き頃は梅より少し遅く、桜より少し早い時期です。上巳（三月三日）の節句に飾る花として親しまれていますが、日本では梅や桜に比べると、春の花としてはやや印象が薄いように思われます。例えば、狩野元信筆「四季花鳥図屏風」（室町時代・白鶴美術館蔵）、伝土佐光信筆「四季花鳥木図屏風」（室町時代・出光美術館蔵）、狩野宗秀筆「四季花鳥図屏風」（桃山時代・大阪市立美術館蔵）、渡辺始興筆「四季花木図屏風」（江戸時代・陽明文庫蔵）など、いくつもの作例が残る四季花鳥図や四季花木図の春の場面に描かれている花木を見てみると、多くは桜か梅、或いはその両方となっています。なお、梅の場合、まだ寒い頃から咲くため、椿などとともに冬の花として描かれることもあります。絵画だけでなく勅撰和歌集などを見ても、春の花木としては、梅と桜が最も頻繁に登場します。早春に咲く梅に対して春たけなわの頃に咲く桜。厳しい寒さの中で

清らかな香を漂わせ、高潔さの象徴とされる梅に対して、豪勢に咲き誇るかと思えば一気に散りゆき、儂さの象徴とされる桜。文人に愛された「漢」の花・梅に対し、日本で特に愛された「和」の花・桜。このように、梅と桜は相互の特徴から対照的に語られながらも、互いに春を代表する花木として殊に愛され、多くの歌に詠まれ、様々な絵に描かれてきました。

それに比較すると、春の花として桃を取り上げた和歌や絵画の数は少なくなります。和歌に注目すれば、『万葉集』には、「春の苑紅匂ふ桃の花下照る道に出で立つをとめ」という有名な歌の他、いくつかの桃の歌が見られますが、平安時代以降の二十一の勅撰和歌集に、桃という言葉が表れる和歌は僅か数首しかありません。絵画に関しては、桃の花を主題とした作例はいくつかありますが、先述しましたように、四季花鳥図屏風などにおいて春の代表花として取り上げられる例はあまり多くありません。

その一方で、中国絵画の作例を

見てみると、呂文英筆「売貨郎図」（明時代・根津美術館及び東京芸術大学芸術資料館蔵）、呂紀筆「四季花鳥図」（明時代・東京国立博物館蔵・図1）、李一和筆「四季花鳥図」（明時代・萬福寺蔵）などのように、四季の花々を描く四幅対において、冬の花木として梅を描き、春の花木として桃を描くものがあります。特に、明時代中期の宮廷画家で、著色花鳥画の名手として知られる呂紀の周辺の四季花鳥図には、桃の花がしばしば登場します。大和文華館所蔵の「花鳥図」（明時代・図2）も呂紀の影響がよく窺える花鳥図で、牡丹と共に桃の花が描かれており、本来は四幅揃いの四季花鳥図の春の場面であった可能性も考えられます。このように、中国の四季花鳥図の中で春の花木と言え、まず桃の花が挙げられますが、日本では特に平安時代以降、春に咲く花としては桜が非常に愛好されるようになります。その中で、梅は咲く時期の違いや、桜に比べ控えめに花をつけるという咲き方の違いなどもあり、早春の花・清廉の花として独自の立場を保ち続けたのに対し、桜より近い時期に咲く桃は、春の盛の花木としてのイメージが桜の陰に隠れていってしまったのではないのでしょうか。

日本においては、春を代表する花木としてのイメージは薄くなった桃ですが、桃の持つもう一つの大きなイメージは日本でも広く受け入れられ、数多くの作品に表現されています。このもう一つの桃のイメージは、もともと花より実と関係の深いもので、たわわに成る果実から桃は多産の象徴とされ、西王母の不老不死の薬とされたり、イザナミノミコトの雷退治に用いられたりするなど、豊穣・長寿・魔除などの力を持つと伝えられてきました。更に、六朝時代

の著名な詩人である陶淵明が、桃の花に誘われて漁師が俗世間から離れた安逸の地に辿り着く『桃花源記』を記したことによって、桃の花も理想郷イメージと深く関係するようになりました。「桃源郷」という言葉が理想郷や仙境を意味するように、隠士が暮らす夢のような豊かな地を表現する際に、桃の花はなくてはならないモチーフの一つとなります。理想郷に咲く花としての桃花のイメージは日本の絵画でも文人画を中心にしばしば見られ、与謝蕪村筆「武陵桃源図」（江戸時代・個人蔵）、田能村竹田筆「桃花流水図」（江戸時代・大分市美術館蔵）などの名品が知られています。

大和文華館所蔵の作品で、理想郷に咲く桃の花を描くものとしては、呉春筆「春林書屋図」（図3）が挙げられます。家屋の裏に薄紅色の花が今を盛りに咲いていますが、紅色がやや濃い点や枝先に付いた細い葉から、この花は桃花であると考えられます。家の中には腕組みした隠士がおり、塀や地面にハラハラと落ちる花びらを見ているのか、訪ねて来る友人を待っているのか、窓から外を眺めています。屋外では童子が小道を掃除していますが、後ろ姿で顔が見えないだけにその表情について想像をかきたてられ、蓬髪で箒をもつことから、伝説の隠者・拾得が思い起こされます。ぼんやりと佇む隠士や意味ありげな童子、木に止まる鳥によって、のんびりとしたどこか不思議な世界が作り上げられていますが、そこへ咲き乱れる桃の花を描くことで、画面に温もりのある春の陽射しが加えられるとともに、理想郷イメージが強められ、よりゆったりとした時間の流れる豊かな世界が表現されています。どのような花をどのように描くかによって、画面から漂う情趣にも大きな影響を与えるほど、文化の中で蓄積された花のイメージは大きな力を持っていると言えるでしょう。（宮崎もも）

（図1は『対幅—中国絵画の名品を集めて—』大和文華館、平成七年より転載しました。）



図1 呂紀筆 四季花鳥図（四幅のうち冬景と春景の二幅） 図2 花鳥図 図3 呉春筆 春林書屋図

季刊 美のたより No.161

平成20年1月5日

発行 大和文華館